

ご主人様と執事と、怪  
盗と。

アルエ

始まりはここから...

---

物心がついた時から、傍にあったのはギターとカスタネットだった。

キレイなドレスを見にまとった女の人が、歌と音楽に合わせて手や足を打ち鳴らす。

それが洞窟の中にある店中に響き渡る。徐々にテンポは速くなり、息づかいも荒くなる...

ギターをかき鳴らす指も必然と強くなっていくのだった。盛大な拍手に飲まれそうになりながら、心と真っ直ぐな視線を感じた。

視線の先にいたのは、身なりの良い男だった。

彼は、後ろにいた人物に耳打ちをしながら俺をしっかりと見つめていた。

観光客が

メインの店で、地元住民が来るのは本当に珍しい。だから目立つというのかもしれないが

、それ以上に彼が華っているオーラがどこか違うように思えた。

客がほぼ出払った頃を見計らって、その人物が俺に近づいてきた。

思えばコレが、俺のこれからの運命を左右する時だったのかもしれない。

「ねえ、君さ。執事に興味ない？」

## 日常生活の中にある非日常（1）

---

執事の朝は早い。

ぐっすりと寝ている暇もないほどに、寝たらあっという間に起きなければいけないという毎日だ。

今日もまた、いつもどおりの日が始まりを告げる。  
カーテンの隙間から眩しい朝日がオレの顔に差し込む。

「...やべ、寝過ごした」

枕元においてある時計を見て、自分が10分寝坊していることに気づき慌ててベッドから飛び起きた。キレイに皺を伸ばしたシャツに袖を通し、ベストを見にまとい、燕尾服を最後に着れば出来上がり。ノブに手をかけて、まわした瞬間なぜだか素直に動かない...

「え？鍵かけてたっけ？」

一生懸命動かしてみるけれど、ピクリともしない。落ち着け、落ち着け。深呼吸をした後、再びノブをまわしてみることにした。今度は拍子抜けするぐらい簡単に回ったので、勢いづいて廊下へと出てしまった。「うおっ！！って、わーーーー！！！！！！」

廊下に出たと思った瞬間、オレの目の前に壁が立ちはだかってそれに思い切りぶつかった。しかし痛みはなく、ただ暖かい感触だけがオレの顔に残っていた。ゆっくりと視線を上げるとそこにいたのは

ここにいてはおかしい人物。むしろ、いてはいけない人物だった。

「カズキ...じゃない、ご主人様...なぜこのような場所に...？」

恐る恐る自分でもわかりきっていることを聞いてしまう。  
オレの名前はオトヤ・カンディド。

首都・コントレーラスの遙か北に位置する田舎町・トローバの出身だ。わけあって、今はこの屋敷で執事なんて柄にもない仕事をしている。そして、この目の前にいる人物がオレのご主人様だ。

名前をカズキ・オルディアレス。

この国の2大貴族の

うちの一つであるオルディアレス家の跡取り息子だ。

国中で、2大貴族の名前を知らない人はいないというぐらいかなり大きな家柄ということになる。

「なんで、俺がここにいるのかって？んなもん、オマエが起こしに来ないからだろ！」

あまりにも大きな声だったので、驚いて彼の腕を引っ張り部屋の中へと引き込んでしまった。「ちょ、声がでかい！

10分寝坊したぐらいで、主人に起こされてたら執事失格だな...」

「ま、昨日は忙しかったからな。10分長く寝させてやったのはオレの愛ってことよ？」  
ウィンクをしながら、烏肌がたつような

ことを言う。そして、オレの部屋の中をじっくりと見渡した。 「  
相変らず何も無い部屋だよな。てかさ、こんな所で寝ないでオレと一緒に部屋でいいじゃん」

はっきり言って、この言動に時々困る。

「だから、そういう事いってると誤解されるっ  
て言っているじゃんか！」 「

誤解?...ああ、オレたちの関係がデキてるって?はははっ!いいじゃん、別に」

よくあるか!屋敷内では、メイド達や使用人達の間ではか  
なり噂されている話だったりする。 俺としては、かなり迷惑な

話でこの前真剣に『男の人しか興味ないんですか?』って真顔で聞かれた。

はっきり言って、俺はノーマルだ!そういう噂を面白がって、カズキが俺にベタベタしてくる  
のがいけない。 「俺にとってすごい迷惑な話なんだけど...そんなことより、朝食

の準備まだだろ?」 すこし無理やりだったかも

しれないけれど、話題を変えることにした。

かれこれ部屋の中で数分が経過している。このまま行くと、ここで彼が寝てしまう可  
能性が出てくる。 それだけはできたら避けたい...いや、避け

なければいけない。

「じゃあ、オレは先に食堂で待ってるよ。目を通さ  
なきゃいけない書類があるらしいしね」 「では、なる

べく早く準備致しますので」

このやりとりが始まって、もう2年が経つ。

このオルディアレス家に来てから、あっという間の2年間だった。

いろんなことがあって、俺の身にふりかかってきた  
出来事に慣れるまで時間がかかったからな。

さてと、さっさと朝食の準備にとりかかりますか。

## 日常生活の中にある非日常（2）

キッチンへと顔を出すと、既に数人の使用人達がせわしなく動いていた。

「遅くなって申し訳ないです」

一言声をかけると、中にいた全員がこちらを向いて軽く頭を下げた。

相変らず、どこかよそよそしい雰囲気なの

はしょうがないか。

気にしていてもしょうがないので、さっさとカズキ用の食事をとりわけて、急いで食堂へと向かう。

「でさ～オヤジが、さっさと結婚しろとかって言うのよ～どう思う？カズキ」

食堂の扉を開けると、カズキと違う声が耳に飛

び込んできた。

声の

する方へ視線を向けると、普通の人ならば驚きのあまり動きを止めてしまうような人物がそこにいた。

俺の視線に気づいたのか、その人物はこちらを向いて手をヒラヒ

ラと振っている。

「あ、オトヤ君。お

はよ～今日の朝ごはんは何？」

「って、貴方は朝ごはんを食べに、屋敷に来たのですか？まっ

たく、王子も暇なんですね」

溜息をつきながら、カ

ズキが目の前にいる人物に対し言葉をかける。

その人物の名前はタイガ・ウェインフォード。この国の王子だ。

「タイガ王子、今朝の食

事は軽めになっていますが...どうなさいますか？」

「んーそうだなあ～紅茶だけ貰おうかな？」

「かしこまりました。す

ぐに用意します」

カズキの前には軽めの食事を、王子の前には暖かい紅茶を運

んだ。王子はカップを手にとって

香りを楽しんでいる。王子

はコーヒーよりも紅茶派なのでいつもホットで出すよう心がけている。

「最初の頃に比べたら、格段に腕をあげたね。これで立派な執事君だね？」

そう褒めてもらった横で、カズキは俺をじっ

と見ながら鼻でフンと笑った。

「まだまだですよ。執事としても、他の事に関しても...ね。そう思いませんか？」

「そうかなあ？オトヤ君は、よくやっていると思

うよ。まだ2年だよ？十分じゃない」

彼らの

会話が途切れそうにないので、俺はさっさとその場を去ろうとした。しかし、それを見ていた

カズキがすぐに呼び止める。

「オトヤ、これ今日の仕事内容だから全て頭の中に叩き込んでおけよ」

そう言って、投げ渡されたのは数枚に及ぶ紙の束だった。

ペラペラとめくってみると、そこに書かれていたのは

事細かに示された仕事内容。

「...昨日仕事し

たばっかりなんですが？」

レス家の飼い犬」

「文句言わない。そう約束しただろ？オレの執事兼オルディア

「犬じゃねえよ...」

ブツブツと文句を言いながら、部屋を今度こそ後にしようとしたら王子から声をかけられた。

「今日、夜は雨が降るらし

いいから防水加工のものにしたほうがいいよ」

「ご忠告ありがとうございます」

廊下に出て、歩きながら渡された書類を眺める。

そこに書かれているのは数字やら、配置図やら

の記号や文章だった。

「相変

らず人使い荒いよな...」

とりあえず今は、執事としての仕事を全うしな

ければ...次は、部屋の掃除だったな。

## 日常生活の中にある非日常（3）

ある程度の掃除を終え、廊下を歩いていると向かい側からタイガ王子が歩いてくるのが見えた。

「王子、お帰りですか？でしたら、お送りいたします」

「い

いよ。どうせ、そろそろやかましい奴が迎えにくるころだし」

そう話をしていると、背後からものすごい勢いで

駆けてくる音が廊下に響いた。

振り返

ってみると、もうすぐ目の前にすごい剣幕の人が息を切らせて立っていたのだった。

「も——！！王子、あれほど一人で歩き回らないで下さい

と言ったでしょう！？」

「ごめーん。だって

、どうせ捜してくれると思ってさ。ほら、もう帰るところだったし」

息を切らしながら喋っている人物の肩を叩きながら、彼はスタスタ

と歩き出してしまった。

「あ、待ってください。

その前に...オトヤさんでしたっけ？王子がお邪魔しました」

「え？あ、ああ...あまり気になさらないで下さい」

そう言葉をかけるとその

人物は頭を下げて、王子の背中を追って行った。

嵐が去ったような状態で立ちつくしていると、ふとポケットの中に何か入っていることに気づく。

まったくいつの間に仕込まれたのか

...一切気づかなかった自分の警戒心のなさに反省。

入っていたのは1枚の紙切れ。多分、王子が去り際に俺のポケットの中に入れたのだと思うが

開いてみて、中に書かれていた言葉に目を丸くした。

「今日のお仕事は私の依頼なので、よろしくお願ひします fromタイガ・ウェインフォード」

「え？カズキの仕事じゃないのかよ...だったら余計、失敗できないじゃないか」

再び紙をポケットの中につっこみ、廊下を歩き出した。

部屋に戻って、書類に目を通してるとカズキからの呼び出しがかかった。

ふと時計に目をやると、いつも呼び出される時間に気づく

。手にしていた書類を服の内側に

忍ばせて、部屋を後に

した。

「お呼びでしょうか？」

「ああ、今日の仕事についてなん

だが...」

「王子の依頼のやつですか？」

そう言うと、カズキは目

を丸くして俺の事をジッと見ていた。王子の依頼だということはどうやら

隠しておきたかったのかもしれない。なのに、俺が知っていることにビックリしたんだろうな。

「なんだ知ってたのか？ていうか、誰から聞

いた？まさか...王子本人か？」

「その

まさかですよ。しかし、書類に目を通していただけどさ...今回の仕事無謀じゃね？」

部屋に置いてある来客用のソファに腰をかけながら、机に向かって  
いるカズキに話をふる。 「オレも思った。でも、オトヤな

らやれるだろ？って話で合意したんだ」

握っていたペンを置き、ゆっくりと向かいのソファに腰をかける。

「頼むから、死体で帰ってくることだ

けはやめてくれよな」

「おい...縁起でもないこと言うなよ」

クスクスと笑いながらカズキは俺

の目を真っ直ぐ見ながら言う。

カズキは、俺を目下の存在として見ないと最初の契約時に言った。

執事として雇うが、二人っきりの時は敬語も尊敬もし

なくていいと言ってくれたのだった。

それは田舎育ち

の俺にとってありがたい話で、実際はすごい助かっている。

ていうか、俺より年下のご主人様っていうことに後で気づいたんだけどね

...あれにはビックリした。

ちなみに俺は21歳で、カズキは19

歳だ。

でも身長は俺より高いし、顔だって美形の類だから女の人にすごくモテる。

反対に俺はというと、童顔で眼鏡着用だか

ら微妙な感じかもしれない。まあ...カズキの後ろに

いる執事

という役割だから、余計にそういう目では見てくれないんだろうな。

「あ、そうそう！」

突然

何かを思い出したかのように、手を胸の前でポンと叩いて笑顔を向けてこう言った。

「どうやら王子は、アチラさんにも仕事の依頼をしたらしいよ？頑張れよ？」

アチラさん...？

マジか？タイガ王子は一体何を考えて

んだよ!!!俺とアイツをどうしたいんだ？

## 日常生活の中にある非日常（4）

「王子が言っていたとおり、雨降りそうだな」

空を見上げて、雲が厚いことに気づく。

あと雨が降る前の独特の空気が漂っているのが解る。

雨

だけならいいのだが、どうやら今日は風も強めらしい...さっきから髪の毛がウザイ。

「さて、もう一度予習しておきますか...」

懐

から出したのは、カズキに渡された書類。数ページめくって、建物の見取り図らしきものを見つめる。

入り口は全部で6つ。ここから見る限り全ての入り口は閉鎖及

び警備員が配置されている。

「どこから入ったら一番楽

...か？そうだな、南東の天窗かな」

図面上で場所を確認。その近くにある柱を目掛けて、ワイヤー銃の照準

を合わせる。

引き金を引くのと同時にワイヤーが

勢いよく飛び出し、柱へと食い込んだ。

「よし、これで下準備はOKかな」

目の前にある建物は、国家主席議員の屋敷の一つ。

この屋敷の中に俺は用があるわけだけど...

用があるのなら、真正面から堂々と入れればいいじゃないかと思うかもしれない。

でもそうできない理由が、俺にはあるんだ。

俺がカズキと交わした契約は主に2つの事について書かれてあった。

一つはオルディアレス家長男であるカズキの執事とし

て働くということ。

そして

もう一つは...オルディアレス家の飼犬となり、代々受け継がれている怪盗レイディアントとして

働いてもらうというものだった。つまり、俺はオルディアレス家の執事

兼怪盗というわけ。

最初はもちろんその言葉に疑い

を持ったし、今までただのフラメンコのギター弾きだった俺がいきなり

怪盗として働けるかっていう疑問があった。とりあえず最初の1年は、ひたすら体力づくりと

美術品を見極める力を身につけていった。そういう事をしな

がらも、執事業をこなさなければいけないので

俺にとってはかなりの重労働

だった...いや、それは今でも重労働なんだけど。

細かい規約はまだまだたくさんあったけれど、そこは割愛ってことで。

盗むものは毎回カズキが今回のように書類として俺に

渡してくれる。一体、どこで調べてくるのかは謎だけど。

それは、適当に選んでい

るというわけではなく国の黒い部分ばかりを狙ってるのだ。

他人の金で私腹を肥やしている人や、悪党やらの美術品ばかりを専門に狙っているという。

理由を前に聞いたことがあったけれど、詳しくは教えて

もらえなかった。ただ、カズキが言うのには

「人の金で幸せになんかなれねえだろ？だから、失って気づくんだよ。いろいろとな」

言っている意味がわからなかった。ただでさえ、お金の価値が俺にとってはまだまだ高価なもので

それなりに給料はもらっているけれど、どうやって使えばいいの

かすらわかっていない。

そのことを言うとカズキは笑

って俺に『田舎モノだな』と言ってくる。悪かったな…。

そして今回は、国家主席議員であるニアス卿の自宅にある美術品を盗みに来たというわけ。

彼が一体何を仕出かしたかという、どうやら土地の無理やりな買収を行って住んでいた人たちの家をどんどん壊し、彼らの住む場所を奪ったらしい。更地になった場所には自分の為の建物ばかりを建設して、国に虚偽の申請をしているという噂もある。

そんな彼が大切にしているという絵画がターゲット

になっている。

「よし、

じゃあお仕事開始しますか」

先ほど柱に向けて飛ばしたワイヤーにフックをか

けて、滑らせる。数秒ののちに窓枠へとたどり着いた。

ふと、窓から中の

様子を見てその現状に思わず声をあげてしまう。

「え…？なんで国軍警察がわんさかいるの？」

基本、俺は予告状みたいなものは出さない。黙って、バレずに済むのであればそれでいいと思ってるからだ。

しかし…今回のようなことは多々あって、いつも予告状の仕業はカ

ズキって決まっている。

きっと今回もそうだろうな…余計

な仕事を本当増やしてくれるよ。

溜息をつき、タイミングを見計らっていると背後に気配を感じ、身体を向ける。

そこに立っていた人物は、三日月を背に腕を組んでこちらを見下ろしていた。

相変らず高飛車な感じがなんともいえない。

「…本当にそっちにも依頼がいったんだな、怪盗ルナさん」

## 日常生活の中にある非日常（5）

---

怪盗ルナとは。

怪盗レイディアント同様に、美術品やらを専門に扱う怪盗である。

この国にいる怪盗はこの二人のみで、よく標的がかぶることもあるらしい...

「ていうか、もしかしてオマエ...また予告状出した？」

「当たり前でしょ？出さないアンタの肝っ玉の小ささにこっちが凹むわ」

なんで、俺の肝っ玉の小ささに凹まれなきゃならないんだ？

こんなところで敵方と口喧嘩している時間は無い。あっという間に、国軍警察は標的である美術品に集まってきているようだった。そして、その中心には見慣れた人物の顔があった。

「あ、シュタイフ刑事だ」

そう怪盗ルナが言い、突然天窓のガラスをぶち破った。

「ちょ、オマエ！！！」

まったく俺のタイミングやら計画やらは全てパァになったことになる。

もちろんその音を聴きつけた警官達が視線を一斉に上へと上げる。

「あ、シュタイフ刑事！怪盗ルナです！それに、怪盗レイディアントもいます！！」

「何ィ？美術品を死守しろ！！絶対に奴らに渡すな！！」

ロープを操り、あっという間に地上へと降り立ったルナに対して俺はまだ天窓付近にいた。

同じように降り立ったところで、俺に勝機はない。

冷静に周りを見渡してみる。

ふと、部屋の隅にいた国家主席議員の姿が飛び込んできた。この状況にそわそわしていてもなぜか落ち着きがない。そして手には何やら握っている感じだな。

「もしかして...」

そそくさと部屋を一人で後にした国家主席議員の後をこっそりついていった。

すると、彼は辺りを気にしながらとある部屋の前で立ち止まり扉を開けた。

「ふう〜ん...やっぱりそういうことか」

部屋に入ったヤツの後から音を立てないように、滑り込む。どうやら気づかれていないようだ。

「はあ...やはり、国軍警察なんぞに頼むんではなかったな...」

「やっぱり。アンタはそういう奴だよな」

俺の声に驚いたのか、すごいスピードでこちらを振り返った。

「な！怪盗レイディアント...何故、ここが...」

「あそこにあるのニセモノだろ？アンタが本物を軽々と警察に任せるわけねえよな」

単純に考えればわかる話だった。コイツは、自分を守るためだけに生きているような奴だから。

その人物の背後にあるのが本物の美術品だ。

「大人しく渡してくれるのであれば、俺は何もしないけど？」

「ふん。薄汚いオマエなんかに渡すものか！！！」

薄汚いのはどちらだといいかけたが、目の前にいるコイツと言い合う時間はない。

懐から銃を抜いて、前にいる人物の頭に向ける。冷たい銃口が確実に眉間を捉えている。

「ひっ！！う、撃たないでくれ...」

両手を前に出し、涙目になりながら必死に訴える。

その姿があまりにも醜くて、苛立ちが募るばかりだった。

「テメエを殺す弾は持ち合わせてねえんだ」

そう言い放ち、背後にあった絵画に対し発砲した。銃口から出てきたのは銃弾ではなく吸盤のついたワイヤー。当たったと同時にワイヤーを巻き取る音が部屋に響く。あつという間に手元にきた画を手を、さっさと部屋を後にしようとした。

「ま、待て！オマエ、誰に雇われてるんだ？もしよかったらその雇われ金の倍額を出そう  
私の専属にならんか？どうだ、いい話だろう？」

まったく...やっぱりわかってねえ。

「アンタさ、空気読めないってよく言われるだろ？」

「は？」

手に持っていた画を壁に立てかけて、相手との距離を縮める。

息がかかる手前で距離を止めて、鼻で笑った。醜い顔をこんな間近で見るのはさすがに堪える。

「俺は誰にも雇われてない。それに雇われ金の倍額なんて金額オマエには出せないよ」

そう言い放って、再び画を手にとって部屋を後にした。

俺はカズキに雇われているという思いはない。

むしろ、お互いの利害が一致しているからこそ成り立っている関係だと思う。

カズキは俺を利用して、俺はカズキを利用する...それでこそその犬だと思うから。

「なんか、後味悪い仕事だ...」

目当ての画を脇に抱えながら、屋敷をさっさと後にしようとした。

しかし、突然目の前に何かが横切ったので思わず足を止める。

「ていうか、まだオマエいたの？」

目の前に現れた人物を見て、そう声をかける。そこにいたのは先ほど屋敷へと突入した時に別れたルナだった。俺の顔を見るなり、いきなり目を輝かせた。

「ラッキー！これで奴らから逃げ切れるわ」

「え？何言ってるんだよ...って、うげっ」

息を切らせている彼女の数メートル後ろから、何人かの国軍警察の姿が見えた。

どうやら彼女は追われている途中らしい...タイミング悪すぎだろ、俺。

「ちょっと、それ！！なんでアンタも画を持ってるのよ！？」

お互いに走りながら、脇に抱えた画を見比べている。どうやらルナはまだ気づいていないようだ。

「怪盗ルナだってえのにちゃんと獲物の姿見たのかよ？」

そう彼女の持っている画に指を指しながら、屋敷の外へと走り出した。

「シュタイフ刑事、何故かルナ及びレイディアントも同じ画を持っているのですが...」

「何？どういうことだ？」

背後で国軍警察がもめている声が聞こえてきた。

どうやら2つも画があることに驚いている様子だった。それもそのはずだ、ニアス卿は国軍警察にニセモノを渡していたとは話していない。つまり、ルナが持っているのが本物だと彼らは思いこんでいるのだ。

「あ————！！サインがない！えー？どういうことよ、コレ！」

自分が手に持っている画をマジマジと眺めながら、突然叫んだ。

サインがないって、決定的な違いじゃねえか…。どんだけ間抜けなんだよ、コイツ。

「な。俺が持っているのが本物ってわけよ、ということで俺はここでさよならするよ」

そういい残すと、懐から銃を取り出し5メートルはある塀へと打ち込んだ。

壁へと命中したワイヤーを巻き取りつつ俺は壁へと登った。

「ちょっと！！卑怯よ、アンタ最初っからわかってたんでしょ！！」

「ていうかさ、俺が嵌めたんじゃないくて依頼人が嵌めたとかって思わないのかよ」

「え？……あんにゃろ、私だけじゃなくあのお方まで嵌めたっていうの？」

一人でわめている彼女を無視して、俺は壁の外へと着地した。

どうやらまだ、国軍警察は場所を把握できていない様子だった。少し離れたところで足音が駆けてくるのが聞えているが、まだ距離はかなりありそうだ。

「じゃあ、さっさとずらかりますかね」